
真剣で私に恋しなさい～Ultra Red～

語り部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で私に恋しなさい〜Ultra Read〜

【Nコード】

N2313P

【作者名】

語り部

【あらすじ】

川神市にある川神学園に転校してきた少年『皇^{すめい}朔夜^{さくや}』。武神のお膝元のこの街で少年は何を見るのか？

真剣で私に恋しなさいのクロスオーバー小説です。感想をいただくと作者が喜びます。

第1幕 転校生（前書き）

何を思ったか4つめを書いてしまった。

頑張って他の小説ともども更新していきます。

ちなみに何とのクロスオーバーかはわかる人はわかるかと・・・

第1幕 転校生

川神市……武神、川神鉄心のいる川神院のお膝元であり、多くの武道家がいる街。

そこに、今1人の少年がやってきていた。

「ここが……川神市か……」

少年の名は皇^{みぎみ} 朔夜^{さくや}。腰辺りまである黒髪を後ろで纏めた黒眼で制服姿の少年。それだけ見ればごく普通の少年だが、彼の顔は非常に端整で街を歩けば多くの女性の眼を引くだろう。

だが、朔夜のその端整な顔には額から右目を通り、服の下まで一本傷が入っており、朔夜の手の甲にも服から傷が見えている。

朔夜は注目を浴びながらも武神・川神鉄心が学長を務める川神学園に向かっていた。彼は今日から川神学園に転入するのだ。

「ん？」

朔夜が川神学園に向かう橋に差し掛かると人だかりができていた。朔夜は何事かと橋の下を見ると黒髪の女性が不良たちをボコボコにし、さらにその不良たちの骨を外してテトリスのように積み上げていた。

「あれが……川神百代か……」

川神百代。川神鉄心の孫娘で世界にその名を轟かす武道家である。

世界中の武道家から挑戦を受け、いまだに不敗と言われ、祖父の川神鉄心か武道四天王ぐらいでなければ相手にならないと言われている。

朔夜は百代を見ていたがしばらくすると目線を外し、学園への道を歩いていった……

川神学園に着いた朔夜は職員室に向かう。するとそこには軍服を着た1人の男性がいた。

「む？朔夜ではないか？」

男性が振り向くと朔夜に声をかける。そのどこぞの赤い大佐を思い出させる声を聞いた朔夜は溜息をつきながら挨拶する。

「お久しぶりです。フランク中将。何故川神に？」

男性……フランク・フリードリヒはドイツ人であり、軍の中将である。朔夜と知り合いなのは少し前に戦場で出会ったことがあったのだ。敵同士で……

「なに、今日から私の娘がこの学園に通うのでね。君こそどうしたのだ？てつきりまだ世界を周っていると思っていたが？」

「俺もこの学園に編入するんですよ」

「ほう……なるほど、では娘のことを気にかけてやってくれないか？」

「構いません」

朔夜がそう言うと2人の前に2つの人影が現れた。フランクの前には鞭を持った女性。朔夜の前には無精髭を生やした男性だ。

「どうも、2年F組の担任の小島梅子です」

「よお、お前さんが編入生か？俺は2年S組の担任の宇佐美巨人だよ。よろしくな」

朔夜は巨人に連れられ自分のクラスへ向かう。ちなみにフランクが案内された2年F組は隣の教室だった。

「んじゃ、おじさんが呼んだら入ってきてくれ。おい、お前ら、今日は編入生紹介すつぞ」

教室に入った巨人がそう言うとともに声がかかった。それを聞いて朔夜は教室に入る。

「んじゃ自己紹介よろしくな」

巨人の言葉に朔夜が頷く。そしてクラスを見た朔夜は思った。

「（個性的なクラスだな）」

そう考える朔夜もかなり個性的な部類に入るのだが……

「編入生の皇 朔夜だ。よろしく」

自己紹介を終える朔夜だがクラスメイトからの評価はまちまちだった。

「ふはははは！おはよう諸君！九鬼英雄である」

朔夜が自己紹介を終えた瞬間に教室に額に傷のある金色の服を着た男とメイドが入ってきた。

「ぬ？お前は誰だ？」

その男、英雄が朔夜に気付くと話しかけてくる。

「俺は今日編入してきた皇 朔夜だ」

「ほう、編入生か！我は九鬼英雄である！困ったことがあったら我に言うがいい！いつでも力を貸してやるぞ！」

2人が挨拶を終えると次第に校庭が騒がしくなってきた。

「なんだ？」

「どうやら誰かが決闘を始めるみたいだな」

巨人の説明を聞いた朔夜が窓の外を見ると赤い髪にポニーテールの少女と金髪の少女が出てきていた。

「あれは一子殿！あずみ！すぐ向かうぞ！」

「はい！英雄様！」

グラウンドで向かい合う2人を見て英雄がメイドのあずみを連れて教室を出て行った。

「決闘か……面白そうだな」

そう呟くと朔夜は英雄の後を追ってグラウンドに出て行った。

朔夜がグラウンドに付いた頃にはすでに決闘が始まっていた。一子という赤い髪の少女が薙刀で金髪のレイピアを持った少女を攻め立てていた。

「一子殿ってのはあっちの赤い髪の子か？」

朔夜は横に立つ英雄に訊ねる。

「うむ。川神百代殿の妹で2 - Fの川神一子殿だ」

「へえ……」

朔夜は真剣な目で一子を見る。それはどこか観察するような視線だったがすぐに笑みを浮かべた。それは性的な厭らしい笑みでもなければ嘲笑するような笑みでもない。感心したような笑みだった。

「努力家ってのは好ましいな」

「わかるのか？」

「見ればわかる。これでも格闘家の端くれだからな」

そうしているうちに一子は金髪の少女に反撃され始めている。

「皇朔夜といったな？ もしや一子殿に惚れたといわんだろうな？」

「好ましいとは思うがさすがに話してもいないうちから惚れたりはしない。もっとも、これからどうなるかはわからんがな」

「そうか……」

「そうなった時のために、さっさとくつついとくことを進めるぜ。俺は惚れたら容赦ないからな？」

それだけ言うと朔夜は教室に戻り始める。その背後では一子が金髪の少女の攻撃を肩に受け、勝敗が決していた。

第2幕 新生活

決闘終了後の昼休み。朔夜は教室で自作の弁当を食べていた。

「おや、随分とおいしそうなお弁当ですね」

すると朔夜に3人の男女が話しかけてきた。

「お前らは？」

「おっと、失礼。私は葵あおい 冬馬ふゆまと言います。以後よろしく」

朔夜の問いかけに色黒で眼鏡をかけた男子生徒が挨拶する。

「俺は井上いのうえ 準じゅんだ。よろしくな」

次に話しかけてきたのはハゲ頭の男子生徒だった。

「僕はね、榊原さかきばら 小雪こゆき。よろしくね、マシユマロ食べる？」

最後に話しかけてきたのは白い髪にの女生徒だった。

「ん、よろしく。それとマシユマロは要らん。肉にマシユマロとか合わないすぎるだろう」

「つつーか肉しかねえじゃねえか」

準が朔夜の料理を見て呟く。実際、朔夜の料理は白いご飯こそ普通だったがそれ以外は焼肉に鶏肉の照り焼きが敷き詰められている。

徹底的に肉付くしだった。

「肉さえあれば生きていける。野菜は要らん」

「医者の子として言わせて貰えば栄養バランスが偏りますよ?」

「モーマンタイ無問題。俺の身体は肉さえあれば健康体でいられる」

「そりゃまたある意味生命の神秘だな」

朔夜の言葉に準が呆れる。そうして朔夜が食事を進めていると2・Sに客がやってきた。

「頼もつ、皇朔夜殿はいらっしゃるか?」

教室に入ってきたのは先程一子と決闘していた金髪の外国人少女だった。

「なんのようだ?モグモグ……」

教室に入ってきた少女の前に朔夜は弁当を食べながら立ち上がり、応じる。

「……ものを食べながら人と話をするのはどうかと思うが?」

「だったら人が食事してる時に訪ねてくんな」

「貴殿のことは父様から聞いている。自分はクリスティアーネ・フリードリヒだ。クリスと呼んでくれ」

「アンタがフランク中将の娘さんだったのか。皇朔夜だ、好きに呼んでくれていい」

するとクリスは眩い笑顔で朔夜に手を差し出した。

「ああ、これからよろしく頼む」

「ん．．．．．」

朔夜は肉を頬張りながらクリスの手を握り返した。

学校終了後、朔夜はこれから世話になる島津寮に来ていた。

「ここがアンタの部屋だよ。風呂は1階と2階に1つずつ。だけど2階には女子の許可なしに上がったなら市中引き回しの後で退学になるからね。過去に実際あったからきをつけな」

「了解」

朔夜はこの寮の寮母である島津しまづ麗子れいこから寮での説明を聞いていた。

「それと平日は私が料理作るけど土日は自給自足だからね？」

「わかりました」

すると麗子はその場を去り、朔夜は自分の荷物の荷解きを始めた。といってもそれほど荷物はないのだが……。ある程度荷解きをするると荷物の中にあった写真立てをタンスの上に置く。そこには無邪気に笑う黒髪短髪の男性と優しく微笑む女性の姿、そして幼き日の朔夜の姿があった。

「さて、今日の分の鍛錬しとかないな」

荷解きを終わると朔夜はランニングウェアに着替え、部屋を出て行った。こうして朔夜の川神市での生活は幕を開けたのだった。

第3幕 約束と焼肉パーティー（前書き）

更新です。ちなみにこの小説のヒロインは読んでいればわかるかと。
いまさらだけどこの小説のクロス先知ってる人いんのかな？

感想お待ちしています。

第3幕 約束と焼肉パーティー

朔夜が転向してきた翌日の土曜日、朔夜は河川敷までランニングに出ていた……2本指逆立ちで……

「ほっほっほっほっ！」

両手の2本指で逆立ちをし、しかもその状態で走っているのだ。普通の人間がやろうとしたら突き指か骨折は確実だろう。しかし当の本人は平然としている。

「おお……」

「あれ？お前……」

その状態で河川敷に到着した朔夜は河川敷でタイヤを腰にくくりつけ、自分を見ている少女がいた。赤い髪のポニーテールに体操服でブルマを履いている。昨日、決闘を行っていた川神一子であった。

「すごいすごい！何か格闘技やってるの！？」

目を輝かせながら朔夜に近付いて来た。

「よっと、まあな。……確か、川神一子だったっけ？」

朔夜はバク転で普通に立つと一子の名前を確認する。

「あれ？何で私の名前……」

「九鬼に聞いた」

そう言うで一子は苦笑いをする。

「あははは……九鬼くんにな……ってことは2・Sの人？」

そんな一子の反応を見て「ああ、九鬼は望み薄いな」と思ってしまった
う朔夜だった。

「昨日2・Sに転校してきた皇朔夜だ。よろしくな」

「うん！よろしく！」

朔夜に笑顔で挨拶を返す一子。その笑顔に朔夜が一瞬ドキッとした
のは内緒だ。

「それといきなりだけどさっき見たことはできれば人に言わないで
もらえないか？」

「え？なんで？」

「んー、格闘技やってるってのは別にいいんだがさっきのはちょっ
とな……で、どうだ？」

「別にいいけど……」

「そのかわりと言っちゃなんだが時間があるときなら組み手の相手
するぜ？」

「ホント!？」

すると一子は嬉しそうに笑顔を作った。

「ああ、約束だ」

朔夜も一子に釣られて笑顔になり、一子の頭を撫でる。

「おおぅ……こ、これは……」

「おっと、悪い」

朔夜はすぐに手を離すが一子は残念そうな顔をしている。

「あ、別に嫌じゃないの。ただ、凄く撫でるのが上手いから」

「あゝ、よく動物の頭撫でてたからな」

それからしばらく軽い組み手をした朔夜は一子と別れ、島津寮に帰っていった。

島津寮に戻った朔夜は風呂で軽く汗を流すと食堂に向かう。するとそこにはすでに先客がいた。

「あ、おはよう」

そこにいたのは目つきの悪い青年だった。

「あん？お前は……」

「あ、俺昨日ここに入った皇朔夜だ」

「ああ、俺は源忠勝だ。つてことは転校生か？」

「まあな。昨日2・Sに転校してきた」

「そうか、俺は2・Fだ」

多少言葉を交わすと朔夜は自分が昨日買って来ていた鳥肉を使って鶏肉の照り焼きを作っていた。

「朝から随分重てえな。身体に悪いぞ？」

「ん…肉を食べないとどうも調子出なくてな」

料理を終えた朔夜は大きな目の7つの鶏肉を悉く食べていた。

「さて、腹ごなしに散歩でも行くか」

食べ終わると朔夜は腹ごなしを兼ねて川神市を散策するため寮を出て行った。ちなみに忠勝は少し前に仕事だと言って出て行った。

「ん、今日の夕飯でも買ってくかな？」

夕方、昼食をガツツリと肉料理で済ませた朔夜は精肉店の前で夕飯を考えていた。いったいどこまで肉を食うのか……

「今日は焼肉にでもするかな？寮の連中にも振舞うか？」

結局悩んだ挙句、朔夜は牛肉を購入して去っていった。

「ん？」

寮に戻った朔夜は寮の中が騒がしいことに気付いた。

「あれ？川神？」

そこには会ったことのない茶色の髪の青年、薄紫色の髪の少女、バ
ンダナを巻いた青年、黒髪の小柄な青年、筋肉質でガタイのいい青
年、黒くて長い髪の女性と同じく黒髪で後頭部で髪を結った少女。
そして一子とクリスがいた。

「あ、皇くん！どうしてここに！？」

朔夜に気付いた一子が寄ってきた。すると他のメンバーの目も朔夜
に向く。

「俺はここに住んでるからな。川神こそどうしたんだ？ここに住ん
でるわけじゃないだろう？」

朔夜が聞いたところ、寮のメンバーに黒髪の女性、川神百代と一子
を交えて焼肉パーティーをしようということになったらしい。

「だったらちようど良いな。俺もちようど肉買ってきたところだ。
食うか？」

「食べる！」

即答した一子だった。その後、焼肉の準備が終わり、食事を始まる。

「っと、椎名だったか？そっちのタレとつてくれないか？」

朔夜がそう言うのと薄紫の髪の少女、椎名京は無言でタレを朔夜に渡す。ちなみに朔夜はすでに一子たち風間ファミリーのメンバーと自己紹介を済ませていた。

「……なあ、皇くんだったっけ？よくそんだけ入るね」

風間ファミリーの軍師、直江大和が朔夜の皿の上にこんもりと積まれた肉を見て言う。

「ふぉーふぁ（そーか）？」

「凄いすね松風」

「確かにおれっちもこれには驚くぜ」

「ちなみに馬肉も大好物だ」

「おれっちを食べても美味くねえぞ！？」

黒髪の刀を持った少女、黛由紀江とそのストラップの松風に冗談を言う朔夜。松風に平然と対応しているのは気にしてはいけない。

「皇くん、肉ばかりだとバランス悪いわよ？」

「野菜は好きくない。だいたい川神だって肉好きだろ？」

「私はちゃんとバランス考えてるわ。野菜も嫌いじゃないし」

「俺は問題ない。俺の身体は肉だけで健康を保てる」

一子は朔夜の隣に座っており、肉しか食べない朔夜を注意している。

「なんか、ワン子と皇くん仲良いね」

そんな2人を見て黒髪の小柄な少年、師岡卓也が呟く。

「なんだあ？ワン子に春が来たのか？」

「いや、あれは完全に友達感覚だな。もともと、どこの馬の骨ともわからん奴にワン子はやらんがな。（まあ、ある程度はできるようだがな）」

筋肉質でガタイのいい青年、島津岳人と百代がそれに続いて言う。

百代は朔夜が格闘技ができることを見抜いていたが。

その後、焼肉パーティーは問題なく終了し、朔夜は自室に戻っていた。

それから数十分後、朔夜は自室で朝と同じように2本指で逆立ちし、そのまま腕立て伏せをしていた。

「354、355、356、35「ドツカアアアアアン!!」
な、なんだ!？」

いきなり響いた爆音に朔夜は部屋を飛び出し、爆発下に向かう。するとそこにはすでに大和がいた。

「直江、なにかあったのか？」

「ああ、女風呂が爆発したらしい。まあ、原因は姉さんなんだけど……」

大和の話によると百代が風呂でクリスを追い掛け回し、弾みで風呂を破壊してしまったらしい。もともしフォームは考えていたらしくとくにお咎めはなかったが……それによってしばらくの間1階の男子風呂を女子と共用で使うことになった。

「男女混浴……ハアハア」

「男女別々に入るに決まってるだろ!」

「そして大和は女子が入浴中に遭遇するんだね」

「お約束だな」

京の言葉に朔夜が同意する。

「んな漫画みたいなこと起きないって」

大和は否定するがそれはすぐに現実のものになるのだった。

第4幕 組み手とお返しと自己紹介と

焼肉パーティーの翌日、河川敷で朔夜と一子は2人で組み手をして
いた。

「たあ！」

「よ、まだ甘い」

一子の突き出した拳を朔夜は左手で受け流す。

「まだまだ！」

「ふん！」

今度は一子の蹴りを受け止め、朔夜は拳を突き出す。

「はあああああああ！」

「おうらあああああー！」

そして2人の蹴るがぶつかり合うと体重の軽い一子はバランスを崩し、朔夜の拳が一子の目の前で止まっていた。

「あゝ、負けたわ〜」

負けを自覚した一子はその場にへたり込む。すると朔夜が手を伸ばし、一子を立たせた。

「川神は攻撃が素直すぎるぞ。もう少しフェイントを入れなきゃな」

「む〜〜〜」

唸る一子を見て苦笑いする朔夜。

「さて、そろそろ時間だな」

朔夜は時間を見て寮に帰ろうとする。

「あ、ねえ皇くん。今日風間ファミリーのみんなで遊ぶんだけど皇くんも一緒に遊ばない？」

笑顔で訊ねてくる一子に朔夜は苦笑いで返す。

「悪いが遠慮しとくよ。それに、俺と一緒にいるのを良く思わない奴もいる見たいだな」

朔夜が言っているのは風間ファミリーの椎名京のことである。彼女は焼肉パーティーで唯一朔夜が話をしていない人物である。朔夜も彼女のことをよくは知らないが必要以上に近づくのを嫌っているであろつことは理解できた。

「そう……」

シユンと落ち込んでしまう一子に朔夜は罪悪感を感じながら一子の頭を撫でる。

「まあそう落ち込むなよ」

「おおぅ……やっぱり気持ちいいわぁ……」

しばらく一子の頭を撫でてから朔夜は寮に戻っていった。

「よう、飯持って来たぞ」

1度寮に戻った朔夜は川神市の山まで来ていた。何故ここに来ているかというと……

「グルルル……」

「くうん」

「にゃ」

「ちゅ」

「シャー！」

彼の周りを囲っている動物たちに餌をやっているのである。ちなみに周りにいるのは犬や猫、ネズミに始まりキツネやタヌキに蛇、果てはタカやクマまでいる。

本来捕食する側と捕食される側の動物が並んで朔夜が持ってきた餌を食べている姿は異様としか言えないだろう。

「ほらほら、仲良く食べるよ」

朔夜の言葉に頷くように動物たちはもしやもしやと餌を食べる。すると餌を食べ終えたクマが近づいてくる。

「グルルル……」

「ふふ、くすぐりたいぞ」

近づいてきたクマは朔夜の顔を舐める。

「にゃ」

「わん！」

「ちゅ」

すると動物たちは餌を食べ終わり、朔夜に群がってきた。

「お、おいおい……ちょ、おちつ……ぎゃあああああ……!!」

あまりにも群がられすぎて傍目にはもはや襲われているようにしか見えない光景であった。

「ふう、酷い目にあつた」

動物たちから開放された朔夜の身体は毛やら羽やらがくつつき、髪の毛もいつもよりボサボサになっている。

時間はもう夕方になり、朔夜はノロノロと寮に帰ってきた。すると寮の中からいい匂いが漂い始めていた。

「ああ、皇く……凄い格好だな」

朔夜は部屋の戻る途中で大和に出会う。大和は動物の毛や羽がくつつき、ボロボロの朔夜を見て驚く。

「ちょっとな。それはそうとこの匂いはなんだ？」

「ああ、まゆつちが昨日の焼肉のお礼につて夕飯作ってくれてるんだよ」

「なるほど……じゃあ俺は風呂入ってからいくわ」

それだけ言い残すと朔夜は1度部屋に戻り、タオルや着替えを持つ

て風呂に入っていた。

その後、風呂から出た朔夜は食堂に来ていた。朔夜の目の前には美味しそうな料理が並んでいる。大和や翔一は携帯電話片手に寮に住

んでいないメンバーに連絡を取っている。

「モロ、晩飯来れるってさ。スグルとアニメ見てた」

「アニメ見てたっつーことはガクトは別行動か」

翔一の言葉を聞き、今度は大和が岳人に電話をかける。

『おいおい、今女とやってんだから電話かけんなよ』

「そっか、邪魔した」

それを聞いた大和は瞬時に電話を切った。岳人が余りにくだらない冗談を言ったからだろう。ちなみに風間ファミリー内で今の言葉が冗談じゃないと考える人間はいない。するとすぐに大和の携帯に電話が掛かってきた。結局、岳人も来れることになり、続いて百代と一子も来れることになった。ちなみに百代はスキップしながら。一子はうさぎ跳びしながら来るらしい。

「……………」

そしてそれを聞いて朔夜はむすつとしていた。

「ん？皇くんどうしたの？」

「直江、川神……あ、妹の方だけだな？……うさぎ跳びで来るって言ってたんだろ？」

「ああ、そうだけど？」

「すぐに止めさせないと格闘家生命に関わるぞ？」

「……………どういうことだ？」

朔夜の言葉に大和は眉を顰める。また、すぐ傍でそれを聞いていた京も同じだ。

うさぎ跳びは昔は下半身のトレーニングに使われていた。だが現代において医学的に有害であり、トレーニング効果は期待できず、スポーツ傷害を引き起こす可能性が高いのだ。*WIKI参照

それを聞いた大和は顔を青くする。

「今はまだ大丈夫かもしれないが身体のことを考えるとやるべきじゃない」

「そうか……………ありがとう」

大和が礼を言うところとちょうど百代と一子が入ってきた。大和はすぐに一子のところに行き、さっき朔夜が言ったことを説明する。すると一子は朔夜のところに寄ってきた。

「えっと。皇くん、ありがとう。大和から聞いたわ。私のこと心配してくれたって」

「別に……………ただ気が付いたから言っただけだ」

「それでもよ。下手したらスポーツ傷害になってたかもしれないんだし」

にぱーと笑顔を浮かべる一子。それを見た朔夜は苦笑いしながら一子の頭を撫でる。

「気にするな」

「おお……気持ち良いわ」

気持ち良さそうに頭を撫でられる一子。それを見て朔夜を睨む京の存在に朔夜は気付きながらも無視していた。

それから数分後、由紀江の料理も完成し、朔夜たちは食事を食べ始めていた。

「お、お口に会えばいいのですが」

不安そうにする由紀江。しかしその美味しそうな料理は見た目通り味も美味しく、全員に高評価だった。

「むぐむぐむぐ」

毎日肉しか食わないこの男も凄い勢いで食べている。

「はむはむはむ」

隣に座っている一子も負けじと食べている。

「ねえ、なんかあの2人似てない？」

「肉好きなところは似てるな」

「食べる勢いもな。食事面では似てるとこ多いな」

ちなみに上から卓也、岳人、大和である。

夕食後、皆美味しい食事に満足そうな顔をしていた。ちなみに朔夜は食器を洗っている。朔夜は唯一この中で風間ファミリーではないので由紀江に他のファミリーのメンバーと友好を深めておくように言っ
て食器洗いを申し出たのだ。

「ふう、まゆっち料理美味しいな。俺様食いすぎたぜ」

「は、はい！小さい頃から母上に教えられてまして」

「うつらうつら」

岳人と由紀江が会話している中、一子は眠そうにしていた。どうやら満腹になったところで眠くなってきたらしい。すると由紀江が何か決意したような顔になった。ちなみにその後、一子が眼の下にリップクリームを塗られ、眠気が覚めたのは余談だ。

「あ、あのあの！私、昨日皆さんのなかまになりましたけど……その……皆さんのことをあまり知らないの、できればこの場を借りて教えて欲しいと」

その言葉を聞き、納得した風間ファミリーのメンバーは自己紹介を

始める。一方、朔夜は聞き耳を立てながら食器を黙々と洗う。

「川神百代3年。武器は己の拳1つ。好きな言葉は誠！」

百代に続き、次に一子が自己紹介する。

「川神一子2年。武器は薙刀。勇気の勇の字が好き」

「2年クリスだ。武器はレイピア。義を重んじる」

「椎名京2年。弓道を少々。好きな言葉は仁。女は愛……」

4人が自己紹介をすると由紀江も自己紹介を始める。

「1年黛由紀江です。刀を使います。礼を尊びます」

女性陣の自己紹介が終わり、続いて男性陣が自己紹介しようとする。しかし……

「んで、あのバンダナがキャップ。私たちのリーダーだな。いかにも馬鹿そうなのがガクト。面倒見はいい。いかにも根暗そうなのがモロコ。優しくはある。で、あそこにいるのが大和。頭が回る私の舎弟だ」

百代が一緒くたにして紹介した。

「うわあ……おざなりな紹介。しかも根暗って……」

「俺様のタフガイさが強調されてねえ」

「女の子が強い時代だよな。男の立場ないぞう」

その紹介に不満な男性陣。ちなみに上から卓也、岳人、翔一である。すると洗い物を終え、朔夜が流し台から離れる。

「おお、そうだ。おい皇。お前も自己紹介しろ」

それを見つけた百代が朔夜に話しかける。例によって京が睨んでいるが朔夜はスルーする。

「何で俺が……」

「お前ワン子と仲良いだろ？それにこの寮に居るんならこれからも顔を合わせる事が多そうだしな」

百代の言葉に朔夜は溜息を吐きながら自己紹介を始めた。

「皇朔夜。クラスは2 - S。武器は……一応、拳。好きな言葉は覇。力のない奴に何かを語る資格はない」

好きな言葉を言った辺りで京に続き、クリスからもキツイ視線を送られる。義を重んじるクリスからすれば力を重んじる朔夜 of 言葉は理解できないのだろう。

他に百代からは武器を喋ることで間が空いたことから興味深そうな視線を送られたが意に介さず、朔夜は自分の部屋に戻っていった。

第5幕 函館旅行（前書き）

凄く久しぶりの更新です。お待たせして申し訳ありません。

感想お待ちしております。

第5幕 函館旅行

朔夜が風間ファミリーに自己紹介してから数週間、世間一般ではすでにGWに突入しようとしていた。風間ファミリーはこの休みにリーダーである風間翔一が福引で当てた函館旅行に行くことになっていた。

相変わらず朔夜は一子以外の……特に京やクリスとは折り合いが悪かった。主に京はファミリーの外の人間である朔夜と仲良くする気がない、クリスは自己紹介の時の朔夜の台詞が原因である。正義を重んじるクリスには力を重視する朔夜は気に入らない相手なのだ。

そして風間ファミリーが旅行に行く前日、朔夜は一子との手合せを終えると自室に戻る。

「あら皇くん、お手紙来てるわよ」

「どうも、麗子さん」

自室に戻ってきた朔夜をこの島津寮の寮長である島津麗子が訪ねてくる。内容は朔夜宛てに手紙が来ているということだった。

「ん？曾爺ひいじいからか……」

そこに記された名前は『皇 朱門すめもん』。朔夜の父の祖父、つまりは朔夜の曾祖父からの手紙だ。すでに100歳に届きそうな老体だが未だに元気な武術の達人であり、朔夜の師に当たる人物である。

「えっと……宿泊券？」

封筒の中には1枚の宿泊券が入っていた。しかも場所は函館。風間ファミリーが行く予定の場所である。

「なにになに？」

次に朔夜は同じく封筒に入っていた手紙を読む。

『朔夜、お前のことじゃから元気でやってると思う。先日、大我^{たいが}くんから函館の温泉宿泊券を貰ったんじゃが生憎儂はその日用事があつて行けなくての。そこでお前にこの宿泊券を贈ることにしたんじゃ。お前はいつも修行ばかりしておるから少し温泉で身体を癒せ』

手紙を読んだ朔夜は曾祖父の気遣いを嬉しく思いながらもどうしようか、と悩む。朔夜は実はかなり温泉好きである。父の友人たちからは爺臭いと言われることもあるが何と言われようと温泉好きである。正直函館の温泉は行きたいのだが……

「ただ、風間たちと会う可能性があるのはな……」

そうなのである。今回入っていた宿泊券の場所は一子や大和が教えてくれた場所と同じ。つまりは向こうで会う可能性が高いのである。そうなればまた京やクリスが不機嫌になりそうなのだが……

「まあ、いいか。なるようになる」

それでもこの男の温泉好きは筋金入りである。結局朔夜は荷造りを始めた。

それから数日、いざ函館に向かう日になった。大和たち島津寮の風間ファミリーのメンバーはすでに駅に向かっている。しかし朔夜は別である。朔夜は着替えを持つと島津寮の駐輪所に停めてある自分のバイクのもとに向かう。

以前、こちらに越してくる前に免許を取り、バイトをして買った黒塗りのオートバイである。朔夜はこれで函館に向かうつもりなのだ。

「よつと……」

朔夜は荷物をバイクの荷台に乗せると自身もフルフェイスのヘルメットをかぶり、バイクに跨る。

「さて、行くか」

そう言うと朔夜はアクセルを全開にしてバイクを走らせた。法定速度をぶつちぎりで見殺ししていたが本人は気にしていない。

朔夜が島津寮を出発してから数時間、風間ファミリーはすでに旅館に到着していた。今、大和と京は旅館の前に立っている。

「お、来たな」

「ほとんど同じスピードだね」

その大和の前から赤い髪と金色の髪が凄い勢いで走ってくる。片方は一子、もう片方はクリスである。この2人は大和たちが旅館に向かうために乗ったバス停からここまで走ってきたのだ。

最初は一子がいつもの修業のつもりで走って行くことにした。その際にクリスを挑発し、2人で競争しながらここまで走ってきたのだ。

「おーし、俺に先にタッチしたほうが勝ちだぞ！」

向かってくる一子とクリスに大和が大声でそう叫び、両腕を左右に広げる。2人のスピードはほぼ互角、このままだと同着の可能性も有り得るが……

「とっ！」

一子はそれを見越してか大和に向かって飛びついた。必然的に大和は一子を抱きとめるために両手で支える。

「な!？」

その結果、大和が広げていた手にタッチしようとしたクリスの手は大和に触れることはなかった。

「き、汚いぞ犬!」

クリスが一子を批判しているが一子自身は気にした様子はない。まあ、確かにこれは一子の作戦勝ちである。

「ん？」

すると大和が旅館の前の道を1台のバイクが走ってくるのを見る。それはどこかで見覚えがあるような……

「皇くん？」

「「「え!？」」」

大和の言葉に一子、京、クリスが驚きの声を上げる。4人の視線の先のバイクが止まり、運転していた人物がヘルメットをとるとそこには朔夜の姿があった。

「皇くん!どうしてここにいるの!？」

突然現れた朔夜に一子が駆け寄って行く。

「うちの曾爺からここに宿泊券貰ってな。ちょうど俺もGWは暇だから来たんだ」

「だったら一緒に来ればよかったのに」

楽しみに話をする朔夜と一子。一方、京とクリスは嫌そうな顔をしていた。

「じゃあ俺は部屋に荷物置いてくるから、またな」

それだけ言い残して朔夜は旅館の人に個室に案内されていた。

「ではごゆっくり」

旅館の人が部屋から出ると朔夜は窓の外の景色を眺める。

「いいとこだな」

朔夜が窓を開けると目の前には生い茂る森が目に入る。

「ぴーぴー」

「ん？」

すると朔夜が負けた窓に向かって野鳥が数羽、朔夜の目の前に飛んできた。

「……ほら」

朔夜が野鳥に手を伸ばすとその手の上に野鳥が留まり、さらに朔夜の肩の上にも数羽の野鳥が乗っかる。

そうしてしばらくの間、朔夜は自身の手や肩に留まる野鳥たちと戯れていた。

その日の夜、朔夜は楽しみにしていた温泉に入りに来ていた。脱衣所に入るとすでに誰か入っているらしく脱衣籠の中に服が入っている。

「よつと...お...」

朔夜が服を脱いで温泉に入るとそこには大和たち風間ファミリーがいた。

「おお！皇じゃねーか！大和に聞いたぞ！お前も来てたんだな！」

真っ先に朔夜に気付いた翔一が手を振っている。朔夜は手を振って挨拶すると温泉に入る前に1度シャワーを浴びる。

「おい貴様ら、見ろよ俺様の肉体美を」

すると岳人がおもむろにポーズをとる。勿論、男のあの部分が丸見えである。

「岳人のはグロいんだから隠してよ」

それをモロに見た卓也が苦情を申し出る。しかし岳人は気にした様子はない。

「別に男同士で隠す必要もないだろ？」

「キャップと岳人が堂々としすぎなんだよ」

そうは言うものの結局岳人も翔一も改める様子はない。

「俺様の息子は銃で例えるとバズーカだな」

「されど未だに対象に撃たれたことはなく、訓練のみ」

「ほんとになあ、しかし砲身は磨いてるぞ。それでお前の愚息はどうなんだ？」

大和の言葉に同意しながらも岳人は逆に大和に聞き返す。

「俺のはマグナムだな。重いのをズドン。キャップのはマシンガンっぽいな。なんか速射性に良さそう」

そして岳人の視線が卓也の方を向く。

「モロの水鉄砲は皮のホルスターに入ってるからな」

「僕も願ってそうなったわけじゃ……」

「それって……」

「いいか？オブラートに包めよ？」

翔一の言葉に大和が忠告する。しかし結局翔一はオブラートに包むことはなく……

「剥けてないのか」

「うわああああああ！！」

ド直球だった。

「オブラートに包めって言ったる！」

「何言ってるんだ？俺はちゃんとオブラートに包んだろ？」

「いやいや、完全に殺しに入ってたろ！」

ワイワイと騒いでいる風間ファミリーを余所に朔夜は無言で頭を洗い、次いで身体を洗い終わっていた。

「そつえば皇はどんな……」

ちょうど身体を洗い終えて温泉に入ろうとする朔夜を大和たちが見

る。すると朔夜のアレが眼に入った。

「ん？どうかしたか？」

そう訊ねる朔夜に対し、大和たちは共通の感想を思い浮かべた。

「……（は、波動砲！？）……」

朔夜のアレを見て4人は恐れおののいていた。

「そ、それはそうとして……大和、俺様覗きがしたいぞ」

「はっ、辞めとけよそんな子供染みた真似……というのは素人だ。覗きたいなら覗け」

「俺様お前のそんな柔軟な考え好きだぜ」

岳人はもはや欲望丸出しである。ちなみに良い子のみんな。覗きは犯罪だから真似しないでね？

「隣を覗くのか？」

「いや、モモ先輩いてそれは無理だし。この下のところに露天風呂見つけたんだよ」

「なんでも下の旅館に明日は女子ラクロス部が合宿するらしくてね
どうやら卓也は岳人にわざわざ調べさせられたらしい。

「そうだ、皇も一緒に覗きに行くか？」

岳人は朔夜に誘いをかけてくるが朔夜は首を横に振る。

「やめとく、興味ない」

「なに！お前まさか亦……」

「言い方が悪かった。好きな女の裸以外に興味がない」

岳人の言葉を遮るように朔夜が訂正する。

「へえ、皇くんは好きな子いるのか？」

「いや、いない」

大和が興味を示したのか質問するが……朔夜は即答である。

「それでも好きでもない女の裸には興味がないってだけだ」

「ふーん、それにしても凄い傷だね」

朔夜の答えに納得した大和は次に朔夜の身体中に刻まれた傷跡に目が行く。もともと右眼にも傷が通っているが身体中にも同じように傷跡が無数にある。

「まあ俺も武術家だからな。修業をしてればこれぐらいなる」

「いやそれでもそこまでなんないだろ？川神院の修行僧たちもそこまで傷だらけの人はいないぜ？」

「何しろ俺は才能なんか欠片もないからな。これぐらいしないと意味ないんだよ」

それだけ言い残すと朔夜は温泉を出て行った。こうして旅行1日目は過ぎて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2313p/>

真剣で私に恋しなさい～Ultra Red～

2011年10月10日00時42分発行